

ごあいさつ

青柳昌宏(1934-1998)は、東京教育大学農学部農学科と理学部生物学科で、昆虫学と動物生態学を学び、和歌山県での教員生活を経て、東京教育大学附属盲学校に赴任しました。附属盲学校時代、日本とニュージーランドの南極地域観測隊に参加してペンギンの生態研究に携り、ペンギン基金初代代表を務める一方、自然保護教育をライフワークとし、日本自然保護協会の自然観察指導員制度を創設しました。附属盲学校時代に開発した、触って学ぶ生物学の授業方法は、日本自然保護協会の自

然観察指導員研修会において、五感を使って感じる自然観察の手法「ネイチュア・フィーリング」として発展し全国に広がっています。本展示会では、筑波大学の先輩でもある青柳昌宏の、学生時代の生物精密スケッチや、南極地域観測隊時代のフィールドノート、附属盲学校時代の触って学ぶ教材を中心に紹介し、自然を見つめ、感じとり、記録することの大切さをお伝えします。

主催者

あおやなぎ まさひろ

青柳昌宏年譜

- 昭和9 (1934)年 東京市赤坂に生まれる
- 昭和19(1944)年 和歌山県に疎開
- 昭和25(1950)年 和歌山県立粉河高等学校に入学
- 昭和28(1953)年 東京教育大学農学部農学科に入学、昆虫学を学ぶ
- 昭和32(1957)年 東京教育大学理学部生物学科に学士入学、動物生態学を学ぶ
恩師下泉重吉が設立した日本生物教育学会の運営に携わる
- 昭和36(1961)年 和歌山県立那賀高等学校教諭として採用される
- 昭和44(1969)年 日本生物教育学会のオーストラリア動植物調査団に参加
- 昭和45(1970)年 東京教育大学附属盲学校に転任
- 昭和46(1971)年 第13次日本南極地域観測隊で生物調査を担当、アデリーペンギンの生態を研究
- 昭和49(1974)年 中央オーストラリア縦断サファリ隊を編成、ダーウィン～パース間を横断
- 昭和53(1978)年 ニュージーランド南極地域観測隊(カンタベリー大学ケープバード調査隊)に参加
日本自然保護協会の自然観察指導員講習会を立ち上げる
- 昭和54(1979)年 筑波大学附属盲学校教頭就任
- 昭和57(1982)年 南アフリカ沿岸鳥類保護財団(SANCCOB)、ケープタウン大学パーシー・フィッツパトリック・アフリカ鳥類学研究所の招待で南アフリカを訪問
- 昭和61(1986)年 神奈川大学附属中・高等学校に転任、ペンギン基金設立(初代代表)
- 昭和63(1988)年 日本自然保護協会編『ネイチュア・フィーリング～からだの不自由な人との自然観察』の刊行にあたり監修者・執筆者として中心的に関わる
- 平成5 (1993)年 日本自然保護協会事務局長就任
- 平成6 (1994)年 日本自然保護協会理事就任、『テオリア～自然を知る50のヒント』刊行
- 平成9 (1997)年 神奈川大学附属中・高等学校校長就任 ガラパゴス諸島にてペンギンの調査
- 平成10 (1998)年 死去



「じっと見れば、見えてくるものがある」

青柳昌宏『テオリア』より

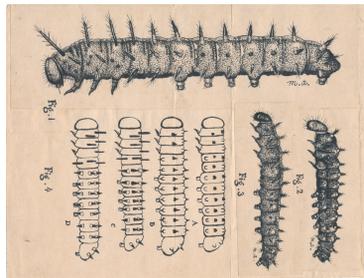
青柳昌宏は、太平洋戦争中、父の郷里である和歌山県に疎開したが、見知らぬ土地になじめず、また体も弱く中学校は半分くらいしか通学できなかった。しかしそのことで動植物に興味をひかれ、南紀生物同好会の活動にも参加するようになった。粉河中学校、粉河高等学校時代は、生物部に所属し、会報にすぐれた生物スケッチを残している。

東京教育大学では、農学部および理学部の授業や実習を履修し、詳細な授業ノートやスケッチを残している。1950年代、東京教育大学では、東京高等師範学校、東京文理科大学の流れを汲む生物学教育が行われていた。青柳は農学部の卒業研究で、国立予防衛生研究所の朝比奈正二郎の研究室に通い、ドクガとその寄生バチ・寄生バエに関する研究を行った。そのスケッチは、『衛生動物』という雑誌に掲載された。青柳は、農学部を卒業後、理学部に学士入学し、下泉重吉に師事して動物生態学を学んだ。動物分類学の丘英通の授業では、詳細な生物の精密スケッチを残している。下田臨海実験センターでは、プランクトンの採集、ウニ・ホヤなどの解剖を通じて、「こんなに多くの分類グループに属する動物が海にいるのか」という素朴な感想を残している。

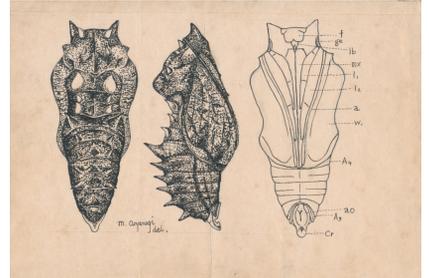
● 動植物の観察やスケッチに夢中になった中学校、高等学校時代



粉河中学校時代のウラギンシジミ幼虫のスケッチ



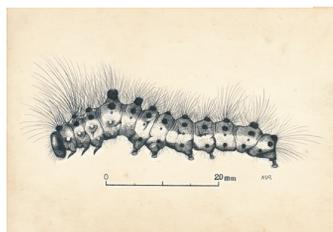
粉河高等学校時代のツマグロヒョウモンの幼虫と蛹のスケッチ



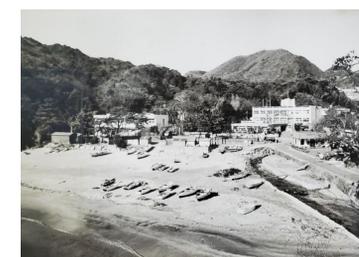
● 東京教育大学の授業や実習を通じて生物の多様性に魅せられた大学時代



東京教育大学農学部時代の青柳昌宏



卒業研究の原図 (ドクガ、ドクガヤドリバエ、モモクロサムライコマユバチ)



東京教育大学理学部時代の下田臨海実験所



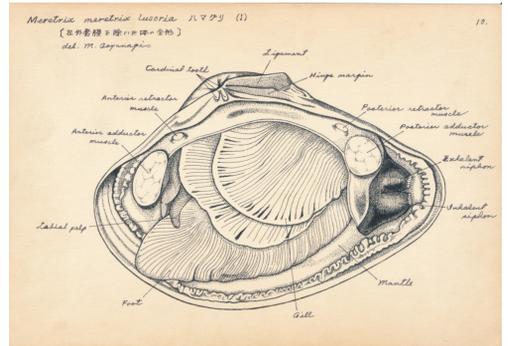
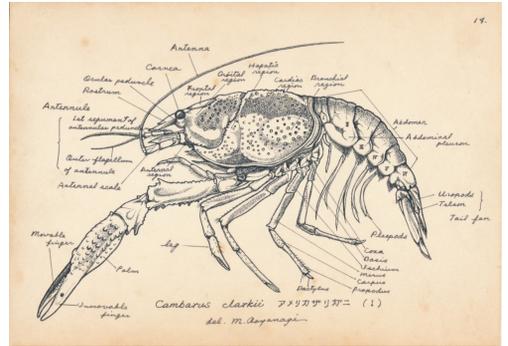
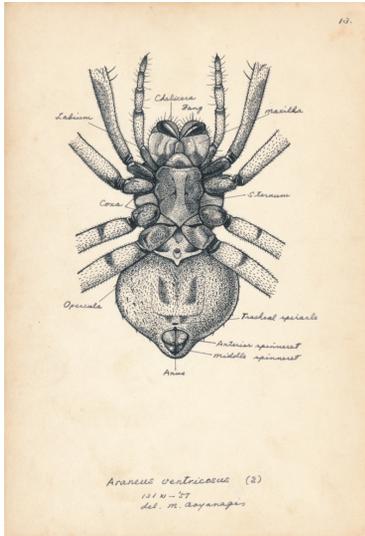
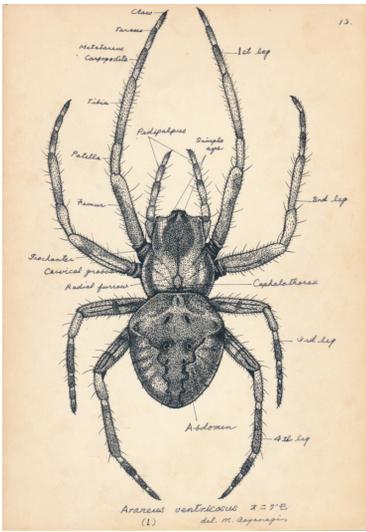
丘英通教授によるプランクトンの実習



下田臨海実習のアルバム

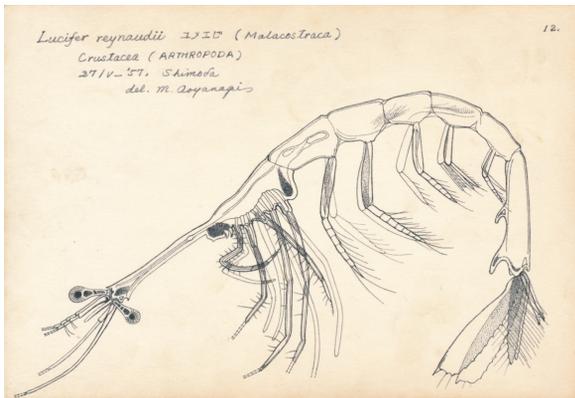
東京教育大学理学部時代のスケッチ

● 丘英通「動物分類学実験」でのスケッチ



オニグモ (上: 表・裏)
 アメリカザリガニ (右上)
 ハマグリ (右下)

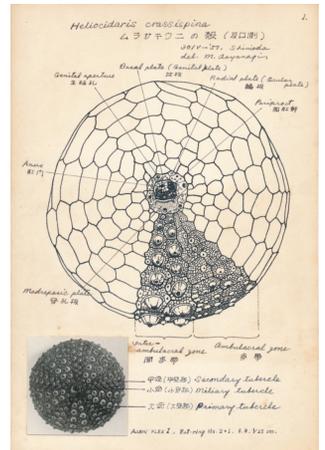
● 下田臨海実験所における実習でのスケッチ



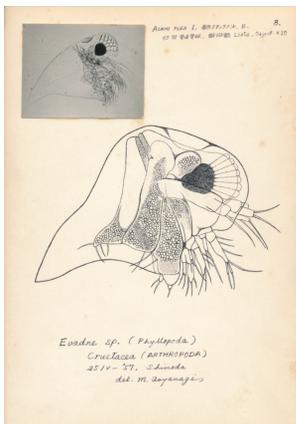
ユメエビ属の一種



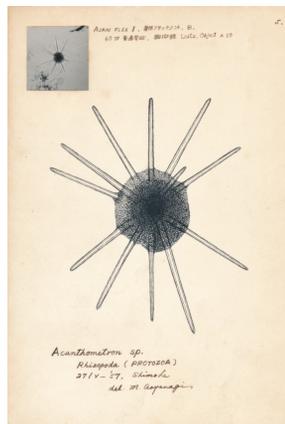
ヤムシ属の一種



ムラサキウニ



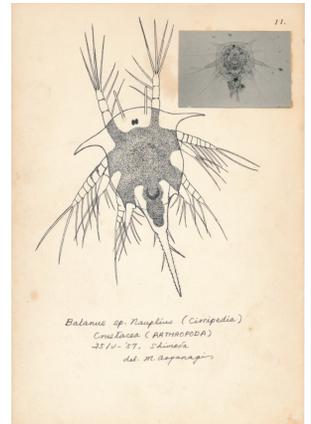
エボシミジンコ属の一種



ウミサボテンムシ属の一種



ヤコウチュウ



フジツボのノープリウス幼生

「描くことによって 見えてくるものがある」

青柳昌宏『テオリア』より

青柳昌宏は、1971年、第13次日本南極地域観測隊の生物担当の隊員としてアデリーペンギンの生態を調査したのを皮切りに、1978年には、ニュージーランド、カンタベリー大学の南極地域観測隊員としてロス島ケープバードに赴くなど、ニュージーランド・オーストラリアの亜南極、南アフリカのケープタウン、南米のガラパゴス諸島などに海外遠征を行いペンギンの生態を調査し、ペンギン基金の初代代表を務めた。

世界の自然を知ること、日本の自然を理解したいと考えた青柳にとって、南極やオーストラリアの砂漠は日本とは対極にある自然を持つ魅力的な場所であった。

教育者であると同時に、ナチュラルリストでもあった青柳は、数多くのフィールドノートにペンギンの生態やその生息地に関するスケッチを残している。また、海外から家族に送った手紙にも、生き生きとした自然のスケッチが描かれている。

著書『テオリア-自然を知る50のヒント』には、「野外にはスケッチブック持参で出かけよう。スケッチしていると、自分の周りを時間が実にゆったりと流れていって、自然の中に浸りきるという感じになれると思う」と書き残している。

1971年、東京教育大学附属盲学校教員時代、第13次日本南極地域観測隊に生物担当の隊員として参加し、アデリーペンギンの生態を研究



1969年から1996年にかけて7回オーストラリアを訪問。1974年には、オーストラリア中央部の砂漠地帯を横断



1978年には、ニュージーランドのカンタベリー大学の南極地域観測隊員として、ロス島ケープバードで、アデリーペンギンのボークアルコミュニケーションを研究



1982年には、南アフリカのケープタウンを訪問。沿岸鳥類保護財団(SANCCOB)の施設でペンギンの保護に携わる



「さわることのでわかることもある」

青柳昌宏『テオリア』より

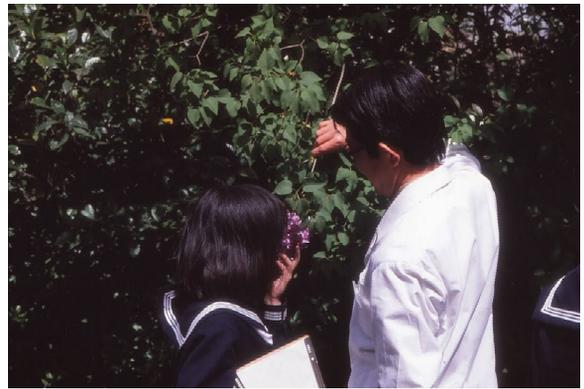
東京教育大学・筑波大学附属盲学校の生物教員として、青柳は視覚に障害のある生徒たちとともに、校庭の樹木の葉や動物の骨格標本をさわって観察（触察）する授業を創り出した。また、プランクトンや細胞のように、さわることができない大きさの対象についても、持ち前のスケッチ力の本質的かつ単純化した原画を描き、サーモフォーム*という手法で、さわって学ぶことができる触図を作成して授業を行った。

後に、青柳は『ネイチャ・フィーリング～からだの不自由な人との自然観察』の中で、「彼らが『触ることによってわかっていく』過程は、目の見える私にとって実に刺激的な観察の経験であり、あらためて自然観察を見直すきっかけになった」と感想を述べている。

さわって観察する自然観察は、日本自然保護協会の自然観察指導の中で、ネイチャ・フィーリングとして共有され、だれもがゆっくりと五感をつかって自然を楽しむ自然観察の方法として、全国に広がっている。

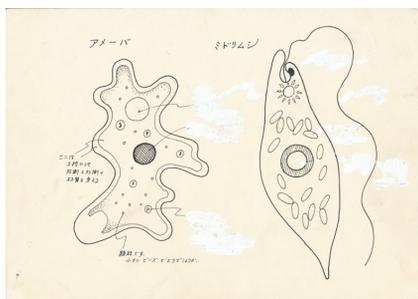
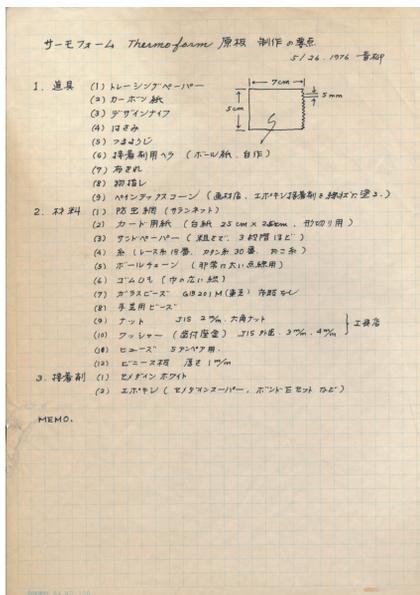
*サーモフォーム：点字の複写装置としてアメリカで開発されたもので、原版の上にプラスチック製のシートを被せ、熱を加えてシートを柔らかくした上で、コンプレッサーで空気を抜き、原版とシートを密着させて、原版を正確に写し取る方法。

東京教育大学・筑波大学附属盲学校において、骨格標本や植物の葉をさわって観察する理科の授業。さわることができない細胞なども、サーモフォームで作った教材をさわって観察する



● さわって観察する生物の教材

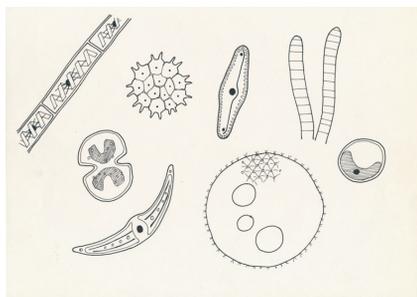
東京教育大学・筑波大学附属盲学校で青柳はサーモフォームによるさわって観察する教材を開発した



アメーバとミドリムシの原図



ミドリムシのサーモフォーム



サーモフォーム作成の手順書

ミカヅキモ、ツツミモ、ケイソウ、ユレモなどの原図とサーモフォーム (筑波大学附属視覚特別支援学校蔵)

● ネイチャア・フィーリング

さわって観察する自然観察の手法は、日本自然保護協会の自然観察指導員制度の中で、誰もがゆっくりと五感を使って自然を楽しむ「ネイチャア・フィーリング」として取り入れられ、全国に広がっている



長野県奥蓼科での自然観察会
コメツガの木をさわって観察する



目や鼻を近づけてしっかり観察する
土の匂いや湿り気を感じ取る



木の幹をゆすって、先端の葉が揺れる音で樹木の高さを知る「木揺り法」

自然を見る、感じる、記録する

— ナチュラリスト青柳昌宏のスケッチと軌跡

Watching, Feeling and Drawing Nature:

Sketches and the Life of Masahiro Aoyanagi

執筆・編集：吉田正人、内田啓子

協力者：鳥山由子、武井洋子、植原彰、志村智子

発行者：筑波大学自然保護寄附講座

発行日：2023年4月10日

展示物は、附属視覚特別支援学校蔵と記載したもの以外は個人蔵です
本書の全部または一部を無断にて転載・複製することを禁じます



青柳が監修・執筆した日本自然保護協会の『ネイチャア・フィーリング からだの不自由な人たちの自然観察』